日法聖人文書の研究（二）

――光長寺文書と古辞書『倭玉篇』特に『拾篇目集』との関連について――

原井慈鳳

一、はじめに

光長寺に蔵する日春日法両聖人文書の中には漢字に片仮名の訓註を付したものが多く見られる。特に日法聖人による真蹟写本『和漢朗詠集』下巻には「雑」以下全文に亘り片仮名の訓註が施され、返り点、句読点、ヲコト点、正字付記が見られる他、文学書、歴史書の出典等迄頭註、脚註に表記されている。又同聖人真蹟『無益外道行集』には朱筆による訓註、訓点が見られる。

室町期以前の点本[註1]は特に古点本と称せられ古訓点の筆写本は筆者により加点されたものが多いと言われるが[註2]、光長寺に蔵される日春日法文書には古点本が多く[註3]、文字の特徴を調べてみると両聖人、特に日法聖人の加筆加点と見られる部分が多く認められる。

この文書類の中から今二種類の文書に注目をして見たい。其の一は昭和の『宝物台帳』第一種宝物四六に分類される日法聖人真蹟断簡五行一紙であり、更には第一種宝物二三に分類される日法聖人真蹟『御法門御聴書』上の中に収録されている異筆部分の六行二紙である。これらの文書には単字に音註、訓註等が付され漢字解説部分が明らかでその表記の方法は何らかの漢和辞書を参照して筆写した可能性が大きい点が共通しているのである。

さればこれらの文書は如何なる古辞書を使用して筆写されたものであろうか。我国の古辞書の研究は多くの先人により進展しているが原本の存在するものは意外に少く、鎌倉期については未解明の分野も甚だ多い。膨大な辞書群の流れの中で光長寺文書は如何なる系統の辞書と関連性が高いのか。類似性の高い多くの種類の辞書の中で主として室町期の写本しか現存しない『倭玉篇』類に共通点の多い事を見出し順次光長寺本との比較を試み乍ら異同を追求して行きたい。

宗祖の御遺文の記事が正確である事はよく知られ御手許には経典類は勿論歴史書、文学書等が存在した事が知られるが漢和辞書に類するものを周辺に御所持されていた可能性も考えねばならない。

先の『和漢朗詠集』下の日法聖人の註記部分を見る時、古典の正確な解釈の為に、又一方では子弟の教育の為に並々ならぬ努力をせられ数多くの関係書籍を参照せられていた事が明白である。歴史、文学、語学の的確な判断の土台の上に積極的な布教活動が展開された事を強く認識しなければならない。

光長寺文書の鎌倉期の年代と筆者が次第にはっきりして来た為に他の分野の関連文書の方にも、新たに解明される点があれば幸甚である。

（この論文は平成四年九月三日法華宗教学研究所総会に於て発表したものをまとめたものです。）

二、光長寺文書に見る漢字解説部分

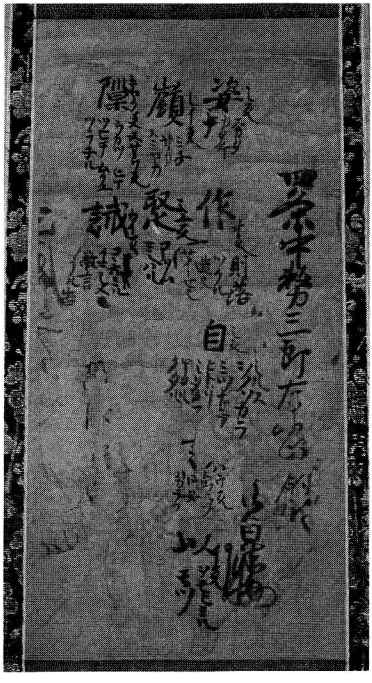
光長寺文書には古点本資料に属するものが多いが今回取上げようとしている文書は準古点本資料ともいうべき訓註本である。即ち何らかの古辞書を引用したと思われる部分に注目し三点をピックアップしてみた。個別に列挙すると次の如くである。

A、日法聖人真蹟断簡五行（漢字九文字表記）
（光長寺宝物台帳第一種宝物四六）

B、『御法門御聴書』上（第十六紙後半六行五十一字）
（光長寺宝物台帳第一種宝物二三
日法聖人真蹟　同書の異筆部分）

C、『御法門御聴書』上（第十七紙前半六行三十七字）
（光長寺宝物台帳第一種宝物二三
日法聖人真蹟　同書の異筆部分）

（一）　日法聖人真蹟断簡五行一紙の検討



写真（A文書）
日法聖人真蹟断簡

当文書は断簡で光長寺宝物台帳の第一種宝物の中に入れられている。軸装、本紙（二五・七cm×一一・二cm）本紙に虫損等の痛みがあり左下には人為的に削り取られたとも見られる欠損部がある。本紙紙背には正月二日と読み取れる文字があり、消息文の一部か、或いは消息文の裏を利用して書かれた文書と考えられる。

昭和の宝物台帳には「日法聖人断簡二十字と判」とあり「御法門御聞書の一部」と註記されているがその根拠は不明である。元禄十二年（一六九九）七月七日、上石田村[註4]、新井與惣右衛門が光長寺に奉納した事が軸装裏の記録に見える。明和の『光長寺霊宝扣』には

一、　日法上人御筆二十字奥御判有之上石田村新井与三右ヱ門寄附一幅

とある。新井家は今日光長寺山内檀家であり土地の旧家である。

江戸中期に奉納されたものであるが「御法門御聞書の一部」という記事は強ち(あながち)否定はできない。同書の断簡が光長寺以外の各所に存在している事は拙稿『日法聖人文書の研究（一）』で述べた所である。[註5] そして当文書に類似する部分が後に述べる通り『御法門御聴書』上巻に存在するからである。

当断間の内容は冒頭に

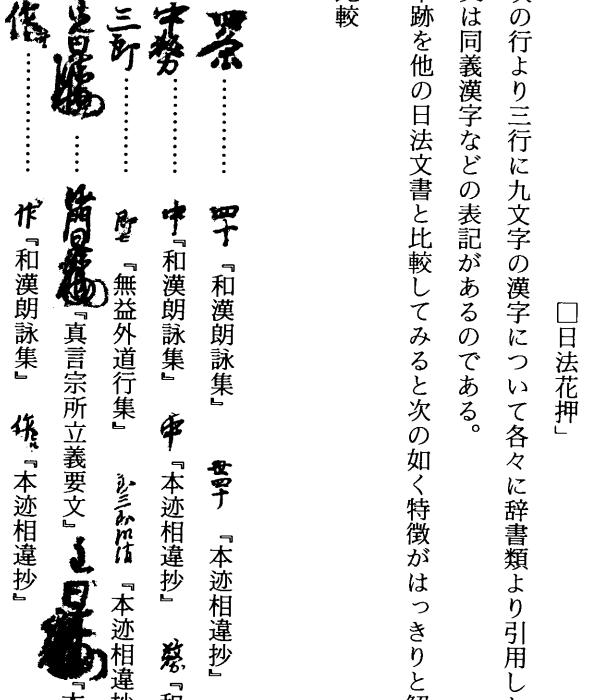
「四条中務三郎□□□□□□(左衛門尉か)殿　　□日法花押」

があり、次の行より三行に九文字の漢字について各々に辞書類より引用したと思われる詳細な読み方、即ち音註・訓註・反切又は同義漢字などの表記があるのである。

先ずこの筆跡を他の日法文書と比較してみると次の如く特徴がはっきりと解る。

文字の特徴比較

A文書



……『和漢朗詠集』　……『御法門御聞書』

……『無益外道行集』　……『和漢朗詠集』

……『和漢朗詠集』

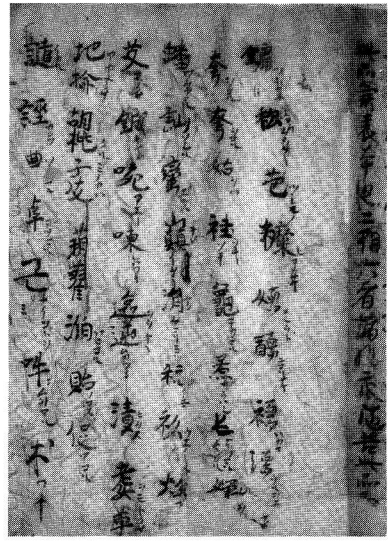
……『真言宗所立義要文』

この文書には四条中務三郎左衛門尉、即ち四条金吾の名前と日法聖人の筆蹟、署名花押があり注目される文書である。署名の後に漢字が解説してあるが如何なる役目を果したものか。署名花押は切り継ぎや後世の加筆でなく正に同一墨色で当初より同一紙に書かれたものである。後世に光長寺に奉納された事を考慮すれば日法聖人より金吾に出された書簡（消息文）の一部なのか、日法聖人の書簡の下書きに漢字のメモ書きをなされたものかその経緯は不明である。

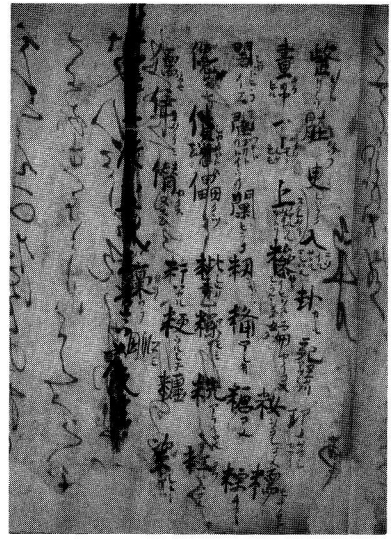
（二）　日春聖人真蹟断簡六行二紙の検討

当文書は『御法門御聴書』上巻の中の二紙である。其の一は第十六紙後半部分六行、五十一文字である。（二七・八cm×一八・二cm）（B文書）この筆蹟は前半部の日法聖人真蹟文字とは全く異るものである。漢字五十一文字に訓註が施され『御法門御聴書』上巻の中に含まれてはいるが連続性が無く当初から同書の中に存在したものか否かは後に述べる。五十一文字には何らかの配列の意味があるのか否かは不明だが難読のものが多く、単字が三十九字、二文字の熟語が四語八字、四文字の熟語が一語四字である。口偏の文字は三字、旁が㒸のものが四字、氵のつく文字が四字、

写真（B文書）
日春聖人真蹟



写真（C文書）
日春聖人真蹟



言偏が三字、女偏が三字等々である。

其の二は第十七紙前半部六行、三十七文字である。（二七・八cm×一八・八cm）（C文書）当文書も『御法門御聴書』上巻に存在するが日法聖人筆蹟とは全く異り其の一（B文書）とは同筆である。当文書はB文書と連続性のあるものと思われるがB、Cの両文書は同一紙ではない。両文書とも同一人筆の紙背文書がありB、C共に同一時に書かれたものである事は間違いないであろう。

『御聴書』の中のB、C文書の前後部分、第十六紙の前半と第十七紙の後半は日法聖人真蹟で『法華文句記』の十に関する記事である。そして両者は『大正蔵経』によれば完全に連続している部分でもある。[註6] さればこの二紙自体は

当初より存在した事になる。

C文書の内容を見ると三十七文字の単字の漢字に音註又は訓が施され、特に「上」「下」「入」に関しては四通りの読み方が各々の文字の下に表記される他「債」「粽」の字にも三通りの読み方が表記されている。更に米偏の文字が十六字四行に列記され、人偏の文字が六字、門構えの文字が三字連続している。なお最終行（七行目）は何文字かが墨により上から下へ塗りつぶされている。

B、C文書の片仮名で記される文字は日春聖人文書『宝物集』、『色心二法事』に酷似しており、漢字に関しても特徴のある文字、「嶺」「籾」「糎」等の文字は次に示す如く『色心二法事』に記された同文字類と非常に近いものであり、B、C文書は日春聖人の真蹟と断定してよいであろう。

文字の特徴比較

日春聖人真蹟『色心二法事』

B文書　……　『色心二法事』第八紙一四行目倒

C文書　……　『色心二法事』第九紙十二行目

C文書　……　（旁比較）『色心二法事』第六紙五行目

『御法門御聴書』は当初は冊子本であった事を考慮すべきである。推定ではあるが日法聖人が第十六紙と第十七紙を書写された時第十六紙のウ（裏）と第十七紙のオ（表）が同時にめくられ書き残されて二頁が白紙になった可能性がある。この部分を後に日春聖人が難字の訓読例を書写して補ったのではなかろうか。

三、　我国古辞書の時代区分と先学による『倭玉篇』の類別

（一）『倭玉篇』の成立と古辞書としての特徴

日本の辞書の歴史は古代中国辞書の学習と共に始まっていると言われ奈良時代が中国辞書の模倣の時代で草創期と称される。辞書、辞書史の研究は字体、音韻、訓義、文法などの直接的史料と共に語彙、語源、造語等の幅広い研究がある。今古辞書の時代による特徴と種類を概観し光長寺文書との接点を探って見る事としたい。

『国語学研究事典』には次の如き古辞書の時代区分が示されている。[註7]

第一期　奈良～平安期（辞書の草創期、中国古辞書の模写）

『篆隷万象名義』……現存最古漢字辞典

『新撰字鏡』……最古の漢和辞書完本

第二期　平安中期～院政（対訳辞書の発達、日本辞書の形成期）

『類聚名義抄』『字鏡』……二大対訳辞書
『倭名類聚抄』『色葉字類抄』……二大百科的辞書
『法華経釈文』『大般若経音訓』…仏典研究・国文・和歌の専門辞書

第三期　鎌倉～室町　（我国辞書の展開期）
『倭玉篇』……単字が主の漢和辞書
『下学集』『節用集』……書くための辞書
『聚分韻略』……作詩用の辞書

（第四期　江戸、　第五期　近代～現代）

第一期の『新撰字鏡』は我国最古の大規模な漢和辞書と言われ標出された漢字は約二万九百三十余字、多くが偏、旁により分類され各字に音註と訓註がある。音註は反切と類音、訓註は漢文によっているが真仮名で示す和音、和訓が補入されている。部首は天・人事・自然動植物の三大区分となり後の『世尊寺本字鏡』や『字鏡集』などの先駆となったと言われる。

第二期の『類聚名義抄』（『三宝類字集』）は著者は僧侶と言われ内容的には興福寺の僧仲算の著『法華経釈文』、真興の『大般若経音訓』などを基礎として仏典の音義や辞書を総合して原撰本が成立している。広益本『名義抄』は原撰本を土台に梵語、仏教語を削除し異体漢字を追加し訓点語その他の和訓を増補している。

『色葉字類抄』は漢字に加えた和訓または字音を語頭の音によりイロハ順に配列した国語辞書でイロハ引きとして

は最も古く平安朝末期に於る一般的な国語であったとされるが文語的で高官、僧侶等知識階級の為の傾向が強いもの。

第三期の『節用集』は中世後期の語彙の漢字表記と読み方を示したもので、成立当初からこの名称であったか否かは不明だが『色葉字類抄』などの影響があると言われ伊勢本系、印度本系、乾本系の三類に大別される。[註8]

語を示す漢字を表記し漢字の右側に最も普通に使われる訓・音を多くは片仮名で示し、この片仮名の最初の字でイロハ順に分類される。『下学集』も『節用集』『聚分韻略』『倭玉篇』と並んで代表的国語辞書である。日常的な用語や書籍を読む時に必要な語彙を集める一方、部門という意味分類を行っている。

『聚分韻略』は虎関師錬（弘安元～正平元年）の著五巻で約八千の漢字を平・上・去・入の一一三韻に分け漢字註を付した韻書で作詞の為に意味分類を加えているのが特徴。本書は図書として最初に出版され中世期重版、改版がなされ広く普及した。

第三期、鎌倉期から室町期の成立の辞書に『倭玉篇』がある。

『本朝書籍目録』は伝存する国書の総目録の最も古いもので、記録される典籍について考証解説を施したものである。奥書きと内容により後宇多天皇の代の末若しくは伏見天皇の代の始め数年の間に撰録されたとされるが、[註9]『仮名玉篇』三巻とあり仁平元年（一一五一）七月四日の仁和寺宰相阿闍梨法文目録に「玉篇三帖上中下」という記録がありこの書が同一のものかも知れないとされる。[註10]しかし『仮名玉篇』は今日に伝存せず内容も解明されず著者も不明である。[註11]今日古写本の識語等から『倭玉篇』は室町期前期の成立というのが定説のようである。

『玉篇』は中国の梁代顧野王撰述の三十巻が原本と言われ『大広益会玉篇』三十巻が宋大中祥符六年（一〇一三）陳彭年により増補された。この『大広益会玉篇』は早くから日本に伝わり石山寺蔵本、藤原公任の作と言われる『大

般若経字抄』に『広益玉篇』の文字が見え中田祝夫氏はこれを『大広益会玉篇』であるらしいとしている。[註12]

川瀬一馬氏ら古辞書の研究者は南北朝末期の五山版を考慮し、この本が室町時代に五山版として刊行されたとしてそれ以降の時代説を採るのである。[註13]『新撰字鏡』『類聚名義抄』『世尊寺本字鏡』『大広益会玉篇』という流れと関係を説く学者もあるが[註14]改編、増補の多き本書の実態はまだまだ未解明の点が多い。

我国の『玉篇（ゴクヘン）』が『倭玉篇（ワゴクヘン）』（和玉篇）と称され室町期の古写本が存在する他、慶長以前の写本のみでも三十種を超え版本も十種に及ぶ。本書は部首分類体の漢和辞書で単字が主で熟語は稀である。写本・版本が多く統一的に概要を表記するのは困難である。字音表記は片仮名が主で反切・類音表記もある。漢音・呉音・唐音の表記あるものもあり『篇目次第』の如く声点の施される例もある。これらの古辞書の写本或いは版本により表記の特徴を現実に比較してみると諸本によりかなりの差異がある事が解る。

光長寺文書の漢字解説部の特徴を種々の点で他書と比較を試みた結果、多くの古辞書群、奈良時代以来の諸本の中で『倭玉篇』という古辞書の系統に類似している可能性が大きい事が判明した。その具体的比較を諸本の特徴に着目して以下に試みる事とする。

先ず『倭玉篇』という古辞書は如何なる系統があり、如何なる諸本があるのか先人の説を辿り乍ら問題点を絞って行こうと思う。

（二）『倭玉篇』の類別例示

『倭玉篇』の類別に関して代表的な説は『古辞書の研究』を著した川瀬一馬氏の類別と『倭玉篇研究並びに索引』を著した中田祝夫氏の類別であろう。前者は現存する古写本、古版本を成立並びに伝流の関係から八類に分類された。一方後者は漢字の分類、部首の配列の方法による五分類をされたのである。

前者の八分類には諸本が江戸期まで類別されているが今は代表的なもの、比較対照した諸本を選び引用してみる。

『倭玉篇』の類別A[註15]

第一類本…
- 『玉篇要略集』大永四年（一五二四）写本三巻……安田文庫蔵
- 京大蔵残欠本（室町末期）……京大蔵

第二類本…
- 『和玉篇』弘治二年（一五五六）写本三巻……安田文庫蔵
- 『篇目次第』三巻　室町中期写本……内閣文庫蔵

第三類本…
- 『拾篇目集』三巻　室町中期写本……国会図書館蔵
- 『音訓篇立』上下　室町末期写本……東大国語研究室蔵

第四類本…
- 慶長二年写本（上巻）……国立国会図書館蔵
- 『元亀字叢』（『倭玉篇』上巻）……岩瀬文庫蔵
- 長享三年（一四八九）写本三巻（原本焼失）……東大国語研究室大正期影写本

第五類本…『倭玉篇』夢梅本　三巻六冊　慶長十年（一六〇五）…東洋文庫蔵

第六類本…　慶長中刊（古活字版）三巻三冊五段組……安田文庫蔵

第七類本…『類字韻』永禄六年（一五六三）写……東大国語研究室蔵

同慶長写……静嘉堂文庫蔵

第八類本…　慶長十五年（一六一〇）刊本……内閣文庫蔵

『倭玉篇』の類別B[註16]

一類…　部首が「日・月・肉・言・木・土・金・水・白……」……の順序

（長享三年本、拾篇目集）

二類…　部首が「雨・風・日・月」以上天象「土・山・邑・水・石・門・宀・穴・」以上地儀……の順序

（大永四年玉篇要略集、字鏡抄系）

三類…　「ネ・玉・土・田・阝・人・女・頁……」……の順序

（弘治二年書写本）

四類…　「金・人・言・心・山・車・長……」……の順序

（慶長年中刊行の古活字版倭玉篇）

五類…　「一・上・示・二・三・王・玉……」……の順序

（慶長十五年版・慶長十八年版など整版本、中国の『大広益会玉篇』の部首順序による）

川瀬一馬、中田祝夫の分類方法は成立の由縁からするもの、部首の配列からするものと方法が異るが多数の異本分類には種々の見方が更に必要となって来ると思われる。これだけ多くの異本が室町以降に存在するという事はそれだけ一般に漢和辞書が浸透して行った事を示しており改編、増補がその必要性に応じて続けられた証拠である。漢字は部首により分類されているがその部首の数は一定せず、どれを部首とするか、偏と旁の入り交った表記もあり部首の数は三百に及ぶものが多い。

四、光長寺文書と『倭玉篇』との関連性

日法聖人は暦応四年（一三四一）正月五日に遷化せられたが八十三歳説[註17]をとれば正嘉二年（一二五八）のご出生となる。また日春聖人は延慶四年（一三一一）三月十六日遷化で八十一歳説をとれば寛喜二年（一二三〇）のご出生となるから鎌倉時代中期から南北朝期初期のご存命である。

光長寺文書は日春日法聖人御所持本として伝来が極めてはっきりとした文書が多く筆蹟が明確となればその中に存する古辞書引用部分が如何なる辞書との関連性が強いのかを明らかにする事は重要である。

偏を主体として単字解説の漢和辞典『倭玉篇』は光長寺文書と共通性を有しており表記方法が他の辞書群よりも類似している事は確かで『倭玉篇』類を系統別に対比してみたい。

『倭玉篇』類の古写本や版本は頗る多く、今は川瀬氏の分類による八類本を主に比較してみたい。但し『倭玉篇』の成立は南北朝末期から室町時代極初期とされ、写本も室町期が最古でそれ以降のものばかりである。その点鎌倉期の光長寺文書との比較上、『倭玉篇』の原流とも言われる『類聚名義抄』や『字鏡抄』まで含めて考慮し比較を試みた。

『倭玉篇』の古写本類は刊本になったものもあるが貴重な古典籍として各所蔵者が所有しこれら原本資料閲覧には種々の手続が必要なものもあり写真撮影や複写も制限がある為、許可を得てノートに書き写したものもある。これらは原本に忠実に筆写したが、異体字や微妙な線の濃淡もありまた原本自体の転写時の誤字もありそのままを稿とさせて頂いた。

国立国会図書館古典籍資料室、東大文学部国語研究室、国立公文書館に於ては特に許可を得て古写本筆記の為に所蔵本を閲覧させて頂いた。

（一）日法聖人断簡と『倭玉篇』類別の表記比較

(イ) 日法聖人A文書

姿（シ反）スカタ　カタチ　シナ

作（サク反）則落　ツクル　造也　サイセ？

自（シ反）シルス　ヨノソカラ　ミツカラ　ヒトリ　シタカフ　マコルル　クタル

□（訪か）ハウ反　トフラフ　ト□ラフ　ハカラフ

以（イ反）ヲモヒミル　モツ

嶺 レイ反 ミ子 サカ スミヤカ

聚 シュ反 アツム マシハル

隙 キャク反 サウ反 ウカツ ヒマ ツヒチ ムクユ ツラ子ル

誠 カイ反 （■）コ、六ミル イマシメ 敬誓 口グル告

(ロ)

『三寶類聚名義抄』（類聚名義抄）（註18）

姿 上咨スカタ 心リリカヲシナ フル万ヒ サマ

以 ユ苡 不我一 ト云ニセ モチ井ル コレヲモテ モツ モテス

誠 一炕杓・益命 イマシム ヌイ イス

誠 正

自 上字 モチ井ル カク／ ミツカラ ケル ヲノツカラ 小シイ コレヲ ムラ 丁ム丁 ツモル

聚 慈庚又 ムラカル ア…マル ソナフ トシカラ 疾句メ 禾シエ

訪 ユ妨 トフラフ 謀禾ハウ ハカル求

嶺 作

(ハ)

『字鏡鈔』天文本（註19）

姿 シ スカタ シナ カタチ

作 ソサ カハル ヲヲツク スクル ノリ オツル ヨイタル ヒナリ タラム ヲサム ツク カフル タメニ

訪 ハウ 、吋円 トフラフ ハカル

嶺 レイ 、 、嶺円 陵 古 タチ ミ子 サカ イタヽ、

自 至 人 古 円 イタル カク コロ ハナ ヒシイマ、 カタチ シタカフ ミツカラ ヲノツカラ ヨリル コレ モチ井ル 井ル ワレ

隙 ケ、カク 陌、隙同 タマノス アナウカツナリ シツカヒ ウカラツ ムクユヌ スナシク アヒタ

以 聚

誡（カイ）　謙（イマシム）　ツク　イヌ

(二)

『玉篇要略集』大永四年（一五二四）写本　（第一類）　（註20）

姿（スカタ）　作（ツクル　サク）　自（ヨリ　ミツカラ　ヲノツカラ）　訪（トムラウ　ハウ）

峯（ミネ　ホウ）　嶺（同　レイ）　（巔（イタ、キ　タカシ　チン））　聚（アツム　シュム）　隙（ヒマ　ケキ）

誠（イマシム　カイ）　以

(ホ)

『倭玉篇』弘治二年（一五五六）写本　（第二類）　（註21）

姿（シ　スカタ　カタチ　サマ）　作（サ　サク　ナス　ツクル　ヲコス　ヲヒタリ　タツ　ヲコナウ）　自（シ　シタカウ　モチ井ル　ヨリ）　訪（ハウ　トフラフ　ハカル）

嶺（レ井　ミ子　タケ）　聚（シュ　アツム　ムラカル）　隙（ケキ　ヒマ　サク）　誠（カイ　ツクル　イマシム）

以（イ　モチフ　ヲモム　コレヲモツテ　ミレハ）

(ヘ)

『篇目次第』室町中期写本　（第二類）　（註22）

姿（子思切　シ反　カタチ　スカタ）　作（子各切　サク反　ヲコス　ナス　ツクル）　自（疾利切　シ反　ヲノツカラ　ミツカラ　ヨリ　ハナ　用也　由也　鼻也）　訪（孚望切　トフ　ラフ　ハカル　ハウ反）

以（イ反　余止切　ヲモイミル　アタフ　モテ　モチイル　コヽニ　マコト）　嶺（レイ反　リャウ反　ミ子　サカ　イタヽキ）　隙（ケキ　丘戟切　シキ反　ヤク反　シッカ反　ツラヌ　ヒマ　アヒタ　ウカツ）　誠（居拜切　カイ反　イマシム　ツク　警也　命也　告也）

聚

(ト)

『拾篇目集』室町中期写本　（第三類本）　（註23）

姿シ反　カタチ　スカタ　シナ　カヤ　ウタカフ

作サク反　サ反　ツクル　ナス　ヨコル　アリ

訪ハウ反　トフラフ　ハカル

嶺レイ反　ミネ　タケ　サカ

聚シュ反　アツム

隙キャク反　ヒマ　ムクユ　玉ノキス

誡カイ反　イマシム

自

以

(チ)

『音訓篇立』室町末期写本　（第三類本）　（註24）

姿シ云　カタ　スカタ　カタチ　シナ　シケ　ミメ　フルマヒ　カヲ　サマ　シケカタチ

作サ云　サク云　ユク　ナス　オル　タメニ　ヨコル　オク　タラム　スクル　ツクル　ハシム　オツ　ノリ　タツ　ヨコス　ヨサム　イタル　ツカフ　サクル　カハル　オヒタリ

自字云　コレヨリ　ホシイマ、　モチ井ル

訪方云　ハカル　アヘラム　トフラフ

隙カク云　ヒマ暇ゞ　隙ゞ　裂ゞ　ケヽ云　閑ゞ　隙同別ゞ

誠カイ云　イマシム　ツクル　サトル

以

嶺

聚

(リ)

『和玉篇』長享三年（一四八九）写本　（第四類本）　（註25）

姿シ　スカタ

作サク　ツクル　ナスコル　ナラフ

自シ　ヨリ　ミツカラ　シタカフ

訪ハウ　トフラフ　ハカル

以イ　モッテス　ヨモチイル　ヨモンミレハ　スル

嶺レイ　ミ子　フカシ

聚シュ　アツマル

隙サウ　ツラナル　ムクユカヘ　ウカツ　ツイテ

誠カイ　イマシム

(ヌ)

『倭玉篇』夢梅本　慶長十年（一六〇五）　（第五類本）　（註26）

姿シ　態也　スカタ

作セク　ツクル　起也造也　ナス　ヲコス

自シ　ミツカラヲノツカラ　鼻也　象形ヌ　由也　率ヒキフ也

訪ハウ　トフラフ　ハカリコト　トフ

以イ　用也　モッテモチフ　呂同

嶺レイ　セカ　坂也或　ミ子　リャウ　作嶺

聚シュ　ヲセム　會　歛也　オル　居　アツモル　ムツ　也　積也　六也　アツム

隙ケキ　シツカナリ　閑也穿　ヒマ　セク　穴也　裂也

誠カイ　告也　ツグル　イマシムル

(ル)　慶長中刊本（古活字版倭玉篇）（第六類本）（註27）

姿シ　スカタ　サマ　カタチ

作サク　ハラフ　ヲコス　ツクル　オサム　ナス

自シ　オノツカラ　ミツカラ　ハナ　ヨリ

訪ハウ　トフラフ　ハカル

隙ケキ　シツラヌ　シツカ　アウカツ　アヒタ　ヒマ

誠カイ　イマシム　ツク

嶺レイ　リャウ　ミ子　イタヽキ　フカシ　サカ

象シウ

(ヲ)　『類字韻』慶長写本（第七類本）『初辞通韻』と合わせ一冊（『松井本』）（註28）

姿シ　一態　カタチ、私野一フル、ヲ　スガタ、スルニ、イ、タチ　ササマカヲ、ミメ

作サ　造ヽ、ヲコル、タラン一ヲ　ツクル、ヲサム　タツ、ヲコル、ハグ、矢ヲ　サク

訪ハウ　トブラフ、コカル　トワク、ハナル　イブカル

以イ　用ヽ、コレ、ヲモンミレハ、コレヲ　モノモッテ　モチイル

自ジ　従ヽ、率ヽヨリ　ヲノヅカラ、ヨシ、モチイ　ミヅカラ　モチイル

隙ゲキ　ヒマ、シヅカ　アヒダ　サク、ツラヌ

(ヲ) 慶長十五年（一六一〇）刊本　（第八類本）　（註29）

姿（シ）スガタシナ フルマヒ タチ カヲ ミメ サマ

作（サ）ナス ヲサム ヲコル ハグ（矢ヲ サツク タツル サク

自（ジ）ヲノヅカラ ミヅカラ ヨリ モチイル ヨシ

訪（ハウ）トブラウ トワク イブカル ユカル ハナル

以（イ）ヲモンミル コレヲモツテ コレ モツテ モチイル モノ

嶺（レイ）ミ子 イタヾキ フカシ サカ リャウ

聚（シュ）アツマル アツム タム トモニ アフ

障（ゲキ）ヒマ アヒダ シヅカ サク ツラヌ

誡

(カ) 『玉篇略』享禄五年（一五三二）写三冊　大東急記念文庫蔵　（註30）

姿 スカタ

作（サク）ツクル ヲコル ハラウ

自（シ）ヨリ ミツカラ ヲノツカラ シタカウ

訪（ハウ）トブラウ ハカル ハカリ コト

以（イ）モッテ スル モチヒル

嶺（レイ）フカシ ミ子

隙（サウ）

誠（カイ）イマシム

聚

光長寺文書A、日法聖人真蹟断簡の漢字九文字には一字毎に単字の音訓表記が見られ反切表示、同義漢字の表記もある。

例えば「自」の漢字の右に音註、反切表記、訓註には七通りの読み方が示され漢字の下に横並びとなっている。「作」には「サク」の反と「則落」の表記がある。「造」の同義漢字も下に示され、「誠」の同義漢字として「警」、「告」の表記も見られる。

又「隙」と示される漢字は「隙」の古字で「隙」が正字（註31）である。「キャク反」「サウ反」と漢音、呉音表記がある。

片仮名には異体字も見られ「ヿ」（ホ）「子」（ネ）「六」（ロ）「丶」「丿」（マ）等々古い形を伝えている。「自」の訓註「ヿコル」、「誠」の「コ丶六ミル」、「聚」の「マシハル」等の読み方も特徴あるものである。

先ず『字鏡鈔』の表記法は「反」又は「切」自体の文字表記なく和訓は三段に及ぶ。『倭玉篇』の一類『玉篇要略集』には音註表記なく、二類本の「弘治二年写本」は例えば「自」の訓註に光長寺本と同じ読み方が無い。『篇目次第』の表記は反切の漢字による表記が詳しく漢字の下に音註、訓註表記が並記される。第三類本の『音訓篇立』は反切の表記が「……伝」とあり訓註はむしろ『字鏡鈔』に類似している。四類本「長享三年写本」も音註の下に反切の文字が見えない。ただ訓註部の読み方は光長寺本に見えるものが含まれている。五類本の「夢梅本」は同義字が「……也」と数多く表記され「作」の音訓「セ」（サ）の片仮名表記は光長寺本にはない。六類本の「慶長中刊本」も音註の反切の文字が無く、同義類字の表記もない。八類本の「慶長十五年刊本」も同様であるが片仮名に濁点表記が見られる。七類本の『類字韻』も濁点表記があり訓註部分が漢字の下に三行で詳記される。『玉篇略』の「姿」「隙」「誠」等の訓註は一例を示すに過ぎず光長本とは異なる。

三類本の室町中期写本『拾篇目集』は反切表記が光長寺本と類似しているのみならず音註が『同本』と比較できる七文字全て同一である。特に「隙」を「キャク」と単独に読むのは当本だけである。訓註部も光長寺本と同じ読み方が多く見られ同じ系統の可能性を有していると判ぜられよう。

（二）日春聖人断簡と『倭玉篇』類別の表記比較

光長寺文書B・Cは日春聖人真蹟文書である。当文書の「上」「下」「入」の詳しい表記を他文書との比較の対象として彼此研究してみたが諸本によりそれぞれ表記方法が異り直ちには論ぜられず、対象字数の多い米偏の十六文字と「彙」の字について日春文書Cと『倭玉篇』類及び『字鏡抄』類を比較してみた。以下に各辞書類の表記を列挙してみる事とする。（一）の日法文書の比較の時と同様、『倭玉篇』類は川瀬氏の八分類の中より特徴的な諸本を選び比較対象としてみた。文字の配列は日春文書に合わせた。

(イ) 光長寺日春聖人文書C

糝（セレ）	編（ヤイコメ）	粆（ヲコシコメ）	糯（モチノヨ子）	
籾（□□（モミか））	粭（ワシ井）	糖（アメ）	粽（チマ、）	
粃（シヒヶ ヌカ）	糙（モミ）	粃（アライコメ）	粒（コフ アハコメ）	
籽（ハカル）	粳（ウルシ子）	糧	粢（シト、 ア□）	
高（カウ ワラ）				

(ロ) 『字鏡鈔』（天文本）

五米部

糝（サム）　糂同　トクコナカヽイヒスリシラケヨ子　ヽ糂同

粈（シウ）　シヒ丁也　ウルシ子　ケタリ　ムナシ　シヒナシ　ハツヤ

粃（ヒ）　秕同　ヌカ

稟　禾ラ

粢（ヘン）　ヒメヤイコメ

糒　糒同　餉同　糒同　カレイヒヤシイヒ　糒同

粳（コウ）　粳同　稑同　稑同　シラケヨ子　ウルシ子　糧同

粧（ニヨチヨ）

粽（ソウ）　稑同　粽同　粽同千マヽ

粗（コウ）　アハコメクミクサシ

糧（ロ）　アラ

粲　陸同　廩　アワシトヽ

第廿九米篇

（註32）

粱　サム云索感反上　シラケヨ子　イクスタ　コナカキ　伊比頃久　精米也

粉　チウ云　ナウ云　モツ　ミ粉刮　古粉字変　高糧也　女敕反也　雑也粽也　肌字同

糇　ヒ云平秘反云　ヤシイヒ　糧共作　或作麁非

粧　偏云　ヤイコメヒメ

粧　サ云　ニヨ云　如呂反　ヨコシコメ

糖　タウ云徒良反　アメ　餳飴也

糯　ナン云奴乱反　モチノヨ子

粽　ソウ云祖送反　ヽチマヽ　音訓同　糉作於　作彩

粃 ヒ云史比反 ヌカ シヒタ ヒエ ハツヤ シヒナ 方腹反上 各尸反也 シヒナ也 米殘屑也 穀有皮无米也

糠 サウ云先カ反 モミ

粃 ハルカ

粳 カラ云古行反柯韲反 ヽヤウ云 アラヌカ アラ ウルシ子 シ ヌカ 秔同 ヌカ 志良介米

粢 シ云帛嶋反 モミヽヒ シトキ アロ

第卅六

高 カウ云 ロラ

糀 セム云玉巾反 アラヒヨ子

糧 ロ云醫右反 廉也硬也食中交蔦 粒也

粗 コウ云戸公反 アハコメ 粟米腐敗 赤米也米 ヨ子カス ニウ云女救反

(二) 『玉篇要略集』(大永四年卯月二日)……第一類本

米部第十七

糝 マナカキス サン

糒 モミ チタ

糯 ホシイヽ

糲 モチ シュ

粳 アメ タウ

粽 チマキ ソウ

粳 アラヨ子 コウ

粢 シトキ シ

(ホ) 『篇目次第』……第二類本

第二百三十一米部

糝 ユ系感切 サン反 シラケヨ子

糒 ナン反 タ反 モチノヨ子

糯 ヘン反 □メ ヤヒコメ

粢 尼呂切 チヨ反 ヨコシコメ

ニヨ反

糅　チン反　マシフ　カタラフ　（籾　同上六）

糒　蒲秘切　ヒ反　ヤシヒ、　カレイヒ

糎　ヒ反　シイタ

糙　サウ反　モミ

糟　カウ反　ウルシ子　シラケヨ子

糖　徒郎切　タウ反　アメ

糀　山串切　セン反　アラヒヨ子

糂　ロ切　アラ无

糉　予貢切　ソウ反　チマキ　（粽　同上俗）

粒　ハカル无

粳　ヒ云　ヌカ　ヒエ　シヒナ　シヒタ　シヒナセ　ハツホ

粉　カウ云　ヌカ　アラヌカ　ウルシ子　アラシヤヌカ、ヤウ云

粮　ヒ　ホシイヒ

粧　シ云　モミ、ヒ　シト、　アワ

粧　ニヨ云　ヲコシコメ

糖　タウ　アメ

粢　コウ反　アハコメ

粢　古茲切　シ反　シトキ

粢　シラケヨ子　イクスタ

粉　チウ　コウ云　モツ　モミ

粮　カウ云　ワラ　（第卅六高篇）

粗　ヲコシコメ

粉　同上

粽　ソウ云　チマ、

糯　ナシ　モチノヨ子

糯　モチイノヨ子

（ヘ）『音訓篇立』……第三類本

第二十九米篇

（ト）『拾篇目集』（玉篇拾篇集）……第三類本

米第卅

編　ヘン反　ヒメ　ヤイコメ

籾（モミ）　粮（ロシイ）

粃（ヒ反ハツテ　シイタ　シヒナ）　糖（アメ）

籽（ハカル）　粳（キャウ反　ウルシ子　アラヌカ）

稾（ワラ）　粢（シ反　シトキ）

(チ)

『和玉篇上』（長享三年八月日）……第四類本

糝（サン　コナカケ）　粉（ショ　ヨコシコメ）　糯（シュ　モチノノコメ）

籾（モミ　ワラ）　糖（タウ　アメ）　糉（ソウ　チマキ）

糖（タウ　アメ）　粔（コウ　フルコメ　クサリコメ）

粢（シ　シトキ）

粉（同上）

粳（シイテ　ヌカ　ハツホ）

粳（カウ　ウルシ子）

糒（ヒ　ホシイ）

稾（カウ　ワラ）

(リ)

『和玉篇』（米沢文庫本）……第四類本（註33）

米百五

糝（セン　コナカキ）　粉（ショ）　糯（ジョ　モチノコメ）

籾（モミ　ワラ）　糖（タウ　アメ）　糉（ソウ　チマキ）

糒（ヒ　ホシイ）

粽（同）

粃ヒ　シイタ　ヌカ　ハツホ

粳カウ　ウルシ子

粢シ　シトギ　ホトギ

粧ヂョ　椹―　ショ

糖タウ　飴也　アメ

糯タ　俗穀字　粘米也

糉ソウ　蘆葉　チマキ　裏米作

粽ソウ　同上　チマキ

糂セン　古　糝　糝　文　文

糀ジウ　人久切―　粽―也　チマキ

糒ヒ　乾飯　ホシイヒ

糔　同上　俗

粗ヒ　不成穀也　シヒナシ　正作粃

粳カウ　ウルシ子　不粘稻　亦作杭

粢シ　稻餅　シトギ　祭米也

粉コウ　スルスゴメ　クサリゴメ

粮コウ　陳臭　フルクモキコメ　米也

禾第一百五

稾コウ　禾稈也　ワラクキ　ヌー草也　ワラクキ

米部百十二

米一百九十七

(ヌ)　『倭玉篇』夢梅本……第五類本

(ル)　慶長中刊（安田文庫蔵）……第六類本

糝（サン）　コナカキ
粉（ニョ）　ヨコシコメ
糯（ナム）　（チか）モナノヨ子
粍（ヒ）　シイタ　シイナ
糒（ヒ）　ホシヒコメ　カレイヒ
糖（タウ）　アメ
粳（カウ）　ウルシ子
粧（モム）　アラヒヨ子
粲（シ）　シトキ
粗（ソウ）　チマキ
紅（コウ）　アハコメ

粽　同上

(ヲ)　『類字韻』（慶長頃写）……第七類本

糝（サン）　コナガキス
粉（シウ）　モミ
粍（ヒ）　ヌカ
糒（ビ）　ホシイ、
粉（ジョ）　ヨコシゴメ
糖（タウ）　飴也
粳（カウ）　ウルシ子
糯（タ）　モチゴメ
粽　チマキ
紅（カウ）　アラマメ　フルクサキコメ
粲（シ）　シトギ

(ワ)　慶長十五年刊本『倭玉篇』……第八類本

米　百七十六

糝（サン）　コナガキス
粉（シウ）　モミ
粍（ヒ）　ヌカ
糒（ビ）　ホシイ、
粉（ジョ）　ヨコシゴメ
糖（タウ）　飴也
糯（タ）　モチゴメ
粽（ソウ）　チマキ
紅（カウ）　アラマメ　フルクサキコメ

稾（カウ）ワラ（艸　百五十）　粳（カウ）ウルシ子　粢（シ）シトギ

(カ)　『玉篇略』（倭玉篇）（享禄五年写）

米　第百六十四

糝（サン）コナカキ　粧（ニョ）ショ　糯（シュ）モチノコメ

粉（モミ）ワラ　糖（タウ）アメ　粽（チマキ）同

粃（ヒ）シイラ　ヌカ　ハツ子　粧（コウ）フルコメ

粳（カウ）ウルシ子　粢（シ）シトキ

藁（ワラ）同上

光長寺文書のB・Cは日春聖人真蹟断簡で漢字が単字及び熟語で表記されている。「萎草（ヲモトクサ）」「俌（ワコル）」等は『倭玉篇』の諸本にも見出し難い古字と見られ、「入」「上」「下」「闥」「糉」「僭」等の文字の音註、訓註も注目すべきである。片仮名も鎌倉期の表現法に注目しなければならない

日春C文書には米偏の文字が連続している為これらの文字と『倭玉偏』類の同文字の比較を、各辞書諸本に表記あるものに関して試みたが例示の通り諸本の表記は各々特徴があり、類似する本と全く系統が異ると思われるものが次

第に明らかになる。紙数の都合により諸本各文字の比較を個別に詳記する事は省くが表記方法が異るものは『字鏡鈔』（天文本）『字鏡』（世尊寺本）、『倭玉篇』第一類本『玉篇要略集』、第五類本『夢梅本』等である。但し『世尊寺本』は和訓註自体は全てに類似しており同時代用語を示すものかも知れない。

第四類本『米沢文庫本』、『長享三年本』第七類本『類字韻』、第八類本『慶長十五年刊本』又『玉篇略』の諸本は類似した和訓註部分もあるが「糝」と記し「コナカキ」「コナカケ」「コナガキス」等々と表記し「粒」を「フルコメ」「クサリコメ」「アラコメ」「スルスゴメ」「フルクサキコメ」等々と表記し光長寺本とは異る部分である。片仮名の濁点表記の本も見える。

第二類本『篇目次第』第三類本『音訓篇立』は「糝」「粽」と記し「シラケヨ子」「イクスタ」等が見え後者の「粒」は「コウ反」「アハコメ」と見える。「粒」「糒」を「ホシイヒ」「ヤシヒ」とするなど訓註が類似するものは多いが音註に前者は「……云」後者は漢字で反切の切を表記する。

第六類本の『慶長中刊本』は「糝」を「サン」と音註し「コナカキ」と訓註するが他の漢字訓註は光長寺文書によく似ている。但「糒」を「ホシヒコメ」「カレイヒ」と記し異なる。

第三類本『拾篇目集』は「糯」を「モチイノヨ子」「糒」を「ヤシイ」「粽」を「チマキ」「粢」を「シトキ」と訓註する。「粽」の字が見えないのが残念だが光長寺本に表記が似ているのは確かである。

『倭玉篇』の先行辞書としての『世尊寺本字鏡』が先学により挙げられている事は既に述べたが日春文書との比較の結果に於ては訓註によく似た部分はあるものの表記方法は全く異る事が解った。更に『音訓篇立』の表記は『世尊寺本字鏡』の系統を引いて簡略化されたものであるとの山田忠雄氏の学説があり、[註34] 両本の構成は三巻本で篇目が一致

する為に『本朝書籍目録』に見える『仮名玉篇三巻』は『音訓篇立』を指すのではないかという見解を表明された。日春文書の米偏の一連の漢字に関して訓註部に類似点が含まれるが「……云」の音註表記は日法文書にも無くこれらの比較に関する限り『倭玉篇』の先行辞書の可能性はあるとしても『仮名玉篇』を指すとは言い切れないと思われる。光長寺文書A・B・Cに関し『倭玉篇』類の諸本との表記比較に於ては第三類本『拾篇目集』が最も近い辞書である事だけは確かである。

五、宗祖御遺文と『拾篇目集』の人口表記

（一）『拾篇目集』にある日本人口記事

『拾篇目集』の下巻最終部分は「曲」第二百四十二の後に雑集部が続き「拾篇目集下」と記される。そして次の頁に数字の「一」より始まる十迄の数字と数字に関連する漢字が並び「松茸」「口斉」「詒」「椀」「奏」「綱首」「大綱」「逃」「迭」「遭」の文字でこの頁が終る。次頁上より一行に次のような男女の人口数が見える。

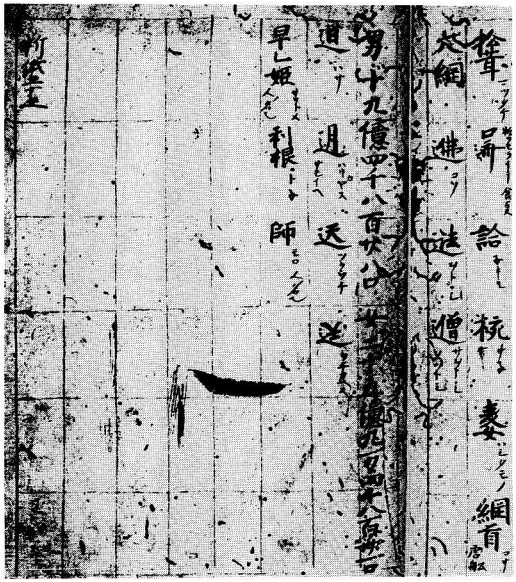
「男十九億四千八百廿八口、女二十五億九万四千八百卅一口」

そしてその後に「迫」「迢」「迭」「迷」「早乙姫」「利根」「師」の文字が続き最終行に「折紙五十五」とあり下巻全てが終る。下巻丁数である。日本の人口数と思われる一行のこの数字の文字はそれ以前の下巻の筆者と同じ手で書かれていると思われる。さればこの記録は注目に値する。

億の単位は今日の億単位ではなく当時は「一、十、百、千、万、億、兆、京、垓……」と数えた中で十万の単位に

当る。今日の数字の単位に合わせれば

「男は百九十万四千八百二十八口、女は二百五十九万四千八百三十一口」と言う事になる。



写真

『拾篇目集』下巻末尾部分

(二) 日本の人口数の古記録

上世、中世の我国の人口数の確たる統計は見る事ができない。人口問題研究学者によれば奈良時代人口に信憑すべき資料は絶無と言ってよいとしている。[註35]『日本書紀』には崇神天皇十二年(八六)に戸口調査の記事が見える他、天智

天皇九年（六七〇）全国的戸籍作成の記事も見えるが具体的数字は未だ見出す事はできない。

『日本長期統計総覧』1には推古天皇の十八年（六一〇）に行われた調査として人口四九八万八八四二人、男一九九万四〇一八人、女は二九九万四八二四人と記している。[註36] この根拠は総務庁統計局に聞いても不明であった。しかしこれは松井輝星著『它山石初編』巻の二[註37]に引用される『太子傳』より出た数字らしい。『太子傳』なる原本は後世の俗書と考えられている。

次に『運歩色葉集』[註38]巻第上第一冊の末尾に見える人口数と男子の数、女子の数の個々に記される人口数である。[註39]「行基菩薩所圖也」と記事中に見え「男数十九億九万四千八百廿八人女数廿九億四千八百廿人也又日男子十九億九万四千八人也女人廿五億九萬四千八百三十四人也」とあり更に第一冊の女子数「廿九億九万四千八百卅四人也」第二冊の男子数「十九億九万四千八百廿八人也又日十九億九万四千八人也」とある。

『續教訓鈔』第十三冊の文永第七歳庚午[註40]にも行基の同図を引用したらしい人口数字が見えるが数値が合わず疑問がある。

『續日本紀』に行基の行状は種々見えるが『行基年譜』安元元年（一一七五）に著されたものが基礎となり『行基大菩薩行状記』が室町時代に著されたものと考えられる。

人口数が見えるのは『年譜』ではなく『行状記』である。「男は十九億四千八十二人、女は二十五億九万八百十一人、都合四十五億八万四千八百九十三人」[註41]とある。しかし実際の合計数は四十四億九万四千八百九十三人である。ここには九万人の差が見られる。

『日本人口史之研究』の著者高橋梵仙氏は『拾芥抄』[註42]の「大日本國圖、行基菩薩所圖也、……」という記事により

『南瞻部州大日本國正統圖』にしても『行基式目』にしても後人が偽作したものと述べている。

『類聚名物考』[註43]巻二百二十五、「政事部七」宇多天皇（後宇多）弘安年間の記に「人民の数、四拾九億九万四千八百二十八人、内男十九億九万四千八百二十八人、女二十九億九万四千八百三十人」と見える。

これは実際に合計すると四十九億八万九千六百五十八人となる。しかし本書は成立が新しく出典も不明である。

『日本略記』[註44]は室町時代の成立と言われるが

「男子ハ十九億二万四千八百廿八人アリ女子ハ二十九億三万六千八百三十一人アリ」と見える。これも出典は不明である。

更に『千葉県史料中世篇』の一冊に所収の『香取文書』は香取神官を始め県内所在の旧社家の文書、社家以外所蔵の関係文書を収録したものであるが、その中の旧案主家文書の中の『香取社名所名寄』に次の記録がある。[註45]

永禄五年（一五六二）の年号があるが出典は不明である。

「日本國中寺之数、一萬一千三十七所

社之数ハ、三千百三十二社

人数ハ、四十九億九萬四千八百八人

日ハ五十一由旬三千四十里

月ハ五十由旬貳千里

星大サ十六由旬四十里

長阿含并樓炭經等之

星大ハ七百里、中ハ五百里、少ハ百廿里

日本國男女之数之事

男ハ十九億九萬四千八百廿八人

女ハ廿九億九萬四千八百三十人

日本國、東へ三千八百七十五里、北南ヱ五百三十里、郡、六百三十四郡、郷、三千七百三郷、

永禄五年壬戌菊月廿四日」

（この記録も人口の合計が合わない。男女数の合計をすると四十九億八萬九千六百五十八人である。）

（三）　宗祖御遺文に示される日本男女人口数

宗祖の御遺文に当時の日本の男女の人口が何ケ所も記されている事はよく知られている。この数字は人口の研究書に於ても紹介された部分があるが[註46]「にわかに信ずるを得ない。」とか「如何なる資料に基いてこの数字を示したか全く不明であるが全然虚偽でもない様に思われる。」等の論述で終っている。

今試みに宗祖の記された人口について年代順にその数字を列記して見る事とする。

◎弘安二年（一二七九）二月二日（身延曽存　写　平賀本）

『日眼女釋迦佛供養事』[註47]

（此日本には男は十九億九萬四千八百二十八人、
女は二十九億九萬四千八百三十人也。
……二十九億九萬四千八百三十人の女の……）

実際合計
四十九億八万九千六百五十八

◎弘安二年（一二七九）五月二日（写平賀本）
『新池殿御消息』[註48]
（日本国の男女四十九億九萬四千八百二十八人ましますが……）

◎弘安二年（一二七九）八月十七日（写朝師本）
『曽谷殿御返事』[註49]
（今日本の人々四十九億九萬四千八百二十八人の男女……）

◎弘安三年（一二八〇）正月二十七日（写朝師本）
『秋元御書』[註50]（定本）
（朝師写本）
（人数ハ四十九億八萬九千六百五十八人也＊
……男ハ十九億九萬四千八百二十八人
女ハ二十九億九萬四千八百三十人也）

＊人数ハ四十九億九萬四千八百二十八人也

◎弘安三年（一二八〇）十月二十四日（真蹟）

『上野殿母尼御前御返事』[註51]

（日本國の男女の数四十九億九萬四千八百二十八人候）

◎弘安三年（一二八〇）十二月十八日（真蹟完中山）

『智抄房御返事』[註52]

（今日本國の四十五億八萬九千六百五十九人の一切衆生……）

◎弘安三年（一二八〇）十二月（真蹟第一六～四七紙大石寺）

『諫暁八幡抄』[註53]

（日本國四十九億九萬四千八百二十八人の一切衆生……

（真蹟には宗祖自身加筆され或云として）[註54]

日本紀云引攣人数云男女四十五億八萬九千六百五十九人云云

近くは日本國四十九億九萬四千八百二十八人は八幡大菩薩の子也）

◎弘安四年（一二八一）五月二十六日（延山録外）

『八幡宮造営事』[註55]

日本國四十五億八萬九千六百五十九人男女をば……
四十五億八萬九千六百五十九人ノ天まほり……
四十五億八萬九千六百五十九人の人々の天にも捨て……
日本國ノ四十五億八萬九千六百五十九人の一切衆生……

◎弘安四年（一二八一）閏七月一日（写興師本）
『曽谷二郎入道殿御報』[註56]
人数ハ四十五億八萬九千六百五十九人或ハ云ク
四十九億九萬四千八百二十八人也寺ハ一萬
一千三十七所、社は三千一百三十二社矣
日本国の一切衆生雖衆多不過
四十五億八萬九千六百五十九人。

◎弘安四年（一二八一）八月八日（真蹟身延曽存）
『光日上人御返事』[註57]（定本）
今日本國の四十五億八萬九千六百五十八人の人々は……
其時日本國四十五億八萬九千六百五十八＊人の一切衆生……

（朝師写本）
＊四十五億八萬九千六百五十九

◎（建長六年系年の『問答抄』にも人口数が見えるが今は採用せず。）

宗祖の示される人口は弘安二年の『日眼女釈迦佛供養事』と『秋元御書』に男女別数字が見え合計人口を示される例が多い。但し合計人口にも四種類ある事が解る。しかし『秋元御書』及び『光日上人御返事』の数字は御真蹟が無く縮冊遺文と朝師写本と数値が異り、朝師写本の方の数字を取るべきと思われる。その理由を以下に述べると弘安三年十二月の『諫暁八幡抄』迄は宗祖は四十九億九萬四千八百二十八人と記され同御書中に宗祖自ら加筆註書して「日本紀に云く」とせられ四十五億八万九千六百五十九人と並記されている。そしてその後はこの数値を用いられているのである（『曽谷二郎入道殿御報』には並記されている）。されば弘安三年十二月に書写された『八幡抄』は同年十二月十八日の『智妙房御返事』に註書後の数値が記されているのでこの御書以前、即ち十二月十八日以前に書かれたものであると考えるべきであろう。

『日眼女』御書に記される男女別人口に類似の記録は『行基大菩薩行状記』の男女人口、『運歩色葉集』の男女人口であり、『類聚名物考』の数字は男女数が合致、又『香取文書』も男女の数値が合致する。

しかしこれらの文書の出典は不明でいづれも宗祖より後の文書であり前述の如く中には偽作と考えられるものも含まれる。

『香取文書』の男女合計数は「四十九億九萬四千八百八人」とあり宗祖の当初の数値に比べ二十人が欠けているのみである（実際に男女合計をすると四十九億八萬九千六百五十八人である）。なお、宗祖の『秋元御書』や『祖谷二郎入道殿御報』に引用せられる日本全国寺社数と『香取文書』に記される寺社数も合致しており出典が不明なのが惜し

まれる。

『運歩色葉抄』に見える男女の人口数の一例は宗祖の数字と非常に近似するが行基菩薩の『南瞻部州大日本國正統圖』を引用したとすると問題がある。ただ人口数についての例示によれば二書以上を引用していると思われる。『運歩色葉抄』は室町の天文十六、七年（一五四七～八）頃に完成したと考えられ内容に引用書の多い事もよく知られるがその中に『倭玉篇』『日本書記』[註58]が含まれる事は本書の伝本の検討と共に今後の研究の材料となろう。『和玉篇』長享三年本（東大国語研究室蔵）の大正影写本には『運歩色葉抄』の中の『倭玉篇』の名目より題名を撰んだ旨が書かれている。

そこで古辞書『拾篇目集』の記録に注目してみると男女別数字と合計数字比較は各々次の通りである。

《男女別》

『日眼女』　男　十九億九萬四千八百二十八人

『拾篇目集』男　十九億　四千八百ホ八口――――（九萬人が欠ける）

『日眼女』　女　二十九億九萬四千八百三十人

『拾篇目集』女　二十五億九萬四千八百卅一口

《合計数》

『新池殿』　四十九億九萬四千八百二十八人

『諫暁八幡抄』　四十五億八萬九千六百五十九人――（差九萬人あり『拾篇目集』が少い）

（宗祖の日本紀云の註記）

『拾篇目集』　四十四億九萬九千六百五十九口――」
（同書の実際合計数）

『日眼女』『秋元』御書の男女別人口数は『拾篇目集』の数値と極めて近い事が解る。『拾篇目集』には男女人口合計数が記されていないので試みに記してみたが宗祖の『八幡抄』に加筆註記せられた数値と丁度九萬の差となる。『拾篇目集』に男の人口九萬が転写落しと仮定すると両者の数値は同一となる。

四十九億九萬四千八百二十八人の数字は『日眼女』『秋元』御書の男女数の実際の合計と異るのであるが宗祖の計算違いではなく何らかの文献を引用せられたものであろう。『香取文書』の数値を見ても了解される。その後合計数の違いに不審を懐かれたものか又何を参照せられたものか不明であるが宗祖は別の人口数を加筆註記せられているのである。

「四十五億八萬九千六百五十九人」の数字を『日本紀』より引用せられたと見えるが今日伝存する『日本書紀』にその数値を求めても見出す事はできない。『日本書紀』は本文の校定がむづかしい上に成立については古写本が散在し論争多き文献である。『日本紀』が『書紀』を指すとは一概に言えず『扶桑略記』飯豊天皇の条に「和銅五年上奏日本紀載之」とあり『和銅日本紀』（旧日本紀）の存在を主張する友田吉之助氏[註59]と『養老日本紀』の存在を主張する坂本太郎氏[註60]の論争があり『日本紀』が何を指すかを限定する事ができない。坂本氏は「『日本紀』についての観念の変幻自在は当時の用法から出たもの」[註61]としており『日本紀』と称して諸々の文献引用の例がある事を示している。

『日本書紀』の解釈記録と言うべき『釋日本紀』『日本紀私記』[註62]にも日本の人口数は見えない。ただ『日本略記』に

宗祖の数値とは異るが男女数の記録がある。[註63] 但しこの文書はその成立と記事に疑問点が多い。

室町中期写本と言われる『倭玉篇』の一類『拾篇目集』は宗祖の御書に見える男女人口数値に近き数字を残す確実な文献と言う事ができよう。所謂宗祖の『日本紀』人口記録とは何かの可能性を追求せねばならないが『拾篇目集』の祖本が鎌倉期に既に存在し、この数字も記されていたとすれば、日春日法聖人文書引用部と近きその辞書と宗祖の示される人口表記に何らかの関連がある事が推定される。

六　結　び

光長寺文書Aは正に日法聖人真蹟断簡である。光長寺文書B、Cは正に日春聖人真蹟断簡である。A文書にある九漢字の辞書表記、B・C文書には米偏十六文字と稟の字の辞書表記を古辞書群の中よりぬき出し個々に比較検討して見た。異同の調査の結果各辞書の表記方法にはかなりの相違があり光長寺文書は一つの系統の古辞書表記に非常に近い表記方法である事が判明した。音訓表記、反切表記、片仮名文字の特徴ある表記によってである。即ち『倭玉篇』の一類『拾篇目集』三巻が注目すべき辞書である事を導き出す事ができた。

川瀬一馬氏の『倭玉篇』の成立説は五山版『大公益会玉篇』の刊行を考慮し南北朝末期から室町極初期とされている。その基本は『字鏡集』に在りとされ『玉篇要略集』を念頭に置かれているように思われる。又、山田忠雄氏、前田富祺氏らは『新撰字鏡』『類聚名義抄』↓『世尊寺本字鏡』『大公益会玉篇』↓『倭玉篇』の如き先行辞書の流れを想定しておられる。山田忠雄氏は『本朝書籍目録』に見える『仮名玉篇』を『音訓篇立』を指すのではないかとされる事は既に述べて来た。

しかし鎌倉後期、南北朝初期の日春日法両聖人文書に記される辞書引用と考えられる部分は『拾篇目集』に近い表記であり『玉篇要略集』又は『音訓篇立』とは明らかに相違がある事も比較の結果判明した。確かに『世尊寺本字鏡』は訓註に於てその多数の表記の中に光長寺文書と同様の読み方も含まれてはいるが表示が詳細で『字鏡集』の系統とは特徴が全く異なるのである。

光長寺文書と『字鏡』『倭玉篇』類の比較に於て『倭玉篇』の成立には『拾篇目集』の系統の本と密接な関係があるのではないかと考慮するのである。

更に『拾篇目集』に見える男女の人口数は、男女別に於て二、三の相違はあるが、合計に於ては宗祖の註記後の数値と九萬の差のみで、転写時の誤記の可能性を考慮すれば、宗祖の御書の人口数値にほぼ一致する事にも注目してみた。

鎌倉の往時の日本の男女の人口数が様々の文献、旧記に様々の数値で見える事は既に述べた通りだが伝説の域を出ないものや後世の転写本等が多く信頼できるものは少い。室町期の写本文献にしても人口数そのものの信憑性はともかく文献自体の成立年代が明らかで人口数値が宗祖御書と同様のものは限られている事も解った。漢和辞書『倭玉篇』類で日本の男女人口数が見えるのは管見では『拾篇目集』のみである。他の国語辞書『運歩色葉集』に見える複数の人口数の出典は何と何か。又宗祖の引用とされる『日本紀』の日本人口数とは何かの研究は勿論必要だが『拾篇目集』の表記が鎌倉末期頃の光長寺文書と極めて近い表記の漢和辞書であるという具体性を兼備する事実を勘案すれば同書の祖本も同様の人口数表記が存在した事は否定できず宗祖の周辺にそれが存在した事も否定はできない。

日春日法両聖人の近辺にこの辞書の祖本が存在した可能性を考慮すれば『倭玉篇』の成立に関して鎌倉期のものが

伝存しない今日、光長寺A・B・C文書は重要な意味を有するものである。即ち『倭玉篇』の成立に新たな可能性を加えるものである。

『本朝書籍目録』にある『仮名玉篇』三巻は『倭玉篇』の前進である可能性が強く既に鎌倉期には成立していたと推定したい。

『仮名玉篇』を顧野王撰玉篇三十巻を簡略にして仮名を付したものらしいという説[註64]もあるが大胆な推論である。「仮名…」という名目は他書にも『仮名日本紀』等があり決して仮名書きを表すのでなく「簡潔な」とか「明解な」という意味に解すべきであろう。

光長寺には日法聖人書写『倭漢朗詠集』があり詳細正確な漢字の訓註や正字註記など漢和辞書を参照している形跡を随所に見る事ができる。鎌倉期の他文書の研究の継続により当論を更に補完でき得れば幸いである。

註記

註1　訓点本の略称、附点本、加点本とも言う。主としてヲコト点及びカナで訓読を示した本、訓点資料とは漢文で書かれた原文、即ち漢籍、国書経典の類に訓読の施されたもの。点本とは言えないが字書の音義、訓註も点本資料に準じられる。

『訓點資料と訓點語の研究』遠藤嘉基著　中央図書出版社　昭和二八年　一二頁

註2　『国語学研究辞典』佐藤喜代治編　明治書院　昭和五二年　四七四頁

註3　光長寺蔵古点本例（日春・日法聖人文書）
『和漢朗詠集』『真言宗所立義要文』『持戒無戒抄』『大般涅槃経要文』『御法門御聴書上』『本迹相違要文上下』『華厳宗所立義要文』『下山抄』（漢文体）『太田抄』『四信五品抄』『後五百歳合文』『天地三才の巻』『文句疏記要文』『色心二法事』等

註4　今日の静岡県沼津市大岡　上石田地区

註5　『桂林学叢』第十五号　平成六年　拙稿一四八～一四九頁
三島本覚寺蔵断簡一紙三行、京都宥清寺蔵断簡一紙十九行、本能寺蔵断簡一紙も『御法門御聴書』の一部である可能性が高い。

註6　『大正蔵経』三四―三四八a～b

註7　『国語学研究辞典』国語史辞書の項　二九二頁

註8　『古本節用集の研究』東京帝国大学文科大学紀要復刻版　昭和四三年　上田万年　橋本進吉著

註9　『本朝書籍目録考証』和田英松著　明治書院　昭和一八年　一九頁
『本朝書籍目録』の成立にも諸説があるが鎌倉時代説が有力

註10　『前掲書』三八一頁

註11　『国語学研究辞典』倭玉篇の項（川瀬一馬説）五三五頁

註12　『倭玉篇研究並びに索引』中田祝夫、北恭昭　風間書房　昭和四一年　解説文

註13　『日本書誌学概説』増訂版　川瀬一馬著　講談社　昭和四七年　二四七頁

註14　『本邦辞書史論叢』「延徳本倭玉篇について」前田富祺、「延徳本倭玉篇と音訓篇立、世尊寺本字鏡」山田忠雄の説

註15　『古辞書の研究』川瀬一馬著　講談社刊　昭和三〇年

註16　『倭玉篇研究並びに索引』中田祝夫、北恭昭編　風間書房　昭和四一年　解説文

註17　『本化別頭仏祖統紀』説によれば九十歳

註18　『鎮国守国神社蔵本　三寶類聚名義抄』尾崎知光編、未刊国文資料刊行会　昭和四〇年　未刊国文資料別巻二

註19　『字鏡鈔』天文本　中田祝夫著

註20　『和玉篇』乾坤　内題は『玉篇要略集』大永四年卯月二日（大東急記念文庫所蔵本）国会図書館写本参照

註21　『倭玉篇』弘治二年本（安田文庫蔵）三巻（『和玉篇集』巻第一、『和玉篇集』巻第二、『和玉篇』巻第下）古辞書叢刊行会　昭和五三年参照

註22　『篇目次第』三巻　内閣文庫蔵（国立公文書館）及び『倭玉篇夢梅本篇目次第研究並びに総合索引』中田祝夫、北恭昭著　昭和五一年　勉誠社　参照

註23　『拾篇目集』三巻　室町中期写、国立国会図書館蔵『玉篇拾篇集』上、中、『拾篇目集』下とあり、由利半左衛門筆とあり

註24　『音訓篇立』九冊（第八冊を欠く）室町末期写　東京大学国語研究室蔵『古辞書音義集成』「音訓篇立」上、下参照

註25　『和玉篇』長享三年本　三巻　東大国語研究室蔵　大正影写本参照

註26　『倭玉篇』夢梅本三巻　慶長十年　東洋文庫蔵『倭玉篇　夢梅本、篇目次第研究並びに総合索引』参照

註27　『慶長古活字版』三巻　慶長中刊　安田文庫蔵『倭玉篇』（日本古典全集之内）正宗敦夫編　日本古典全集刊行会発行昭和一一年　参照

註28　『類字韻』三巻（松井本類字韻）慶長頃写　静嘉堂文庫蔵『類字韻、初辞通韻』国立国会図書館蔵写本参照

註29　『慶長十五年刊本』（慶長庚戌仲春日）内閣文庫（国立公文書館蔵）『倭玉篇研究並びに索引』中田祝夫、北恭昭編　昭和四一年　参照

註30　『玉篇略』三冊　享禄五年写　大東急記念文庫蔵『玉篇略（倭玉篇）』古辞書叢刊行会原装影印版　昭和五一年参照

註31　『大漢和辞典』巻十一　諸橋轍次著　九五八頁

註32　『古辞書音義集成6』『字鏡（世尊寺本）』築島裕解題　汲古書院　昭和六三年　二三九頁

註33　『倭玉篇五本和訓集成』本文篇　北恭昭編　汲古書院　平成六年　六八九頁

註34　『本邦辞書史論叢』「延徳本倭玉篇と音訓篇立・世尊寺本字鏡」山田忠雄著　昭和四二年

註35　『日本人口史之研究』第一　高橋梵仙著　日本学術振興会　昭和四六年　六〇頁

註36　『日本長期統計総覧1』日本統計協会編　昭和六二年　三二頁

註37　『它山石初編』巻の二　日本随筆大成第二期巻四　三三頁

註38　『運歩色葉集』天文一六～一七年（一五四七～四八）成立、著者未詳、室町時代の通用語をいろは分けした国語辞書、多方面の引用書あり『有林福田方』『拾芥抄』『日本紀私記』『河海抄』『仮名文字遺』等々が知られる。

元亀二年本参照

註39　『元亀二年京大本運歩色葉集』京大文学部編　臨川書店　昭和六三年　巻第上一一八頁　女子数三九頁　男子数一六九頁

註40　『續教訓鈔』第十三冊巻第二二　日本古典全集本下　五五〇頁

註41　『行基大菩薩行状記』續群書類従　第八輯（昭和三三年）　傳部　四四五頁

註42　『拾芥抄』別名『拾芥略要抄』『略要抄』三巻、和田英松氏によれば『本朝書籍目録』の奥書きに目録書写の年を永仁二年（一二九四）と記しておりそれ以前の著作で増補をくり返したという。上中下三本を本末に分け古代の制度、学芸、習慣に関する各称、関連記事を収録している。

註43　『類聚名物考』三四二巻　山岡浚明著　内閣文庫本、国会図書館本、静嘉堂文庫本、東京大学本等がある。和漢の諸書を博捜し整理記述した類書、明治三七年版　第五冊

註44　『日本略記』の記述は『続々群書類従』第八地理部一一～一四頁

註45　『千葉県史料　中世篇　香取文書』千葉県史編纂審議会編　昭和五八年　四二八～四二九頁

註46　『日本人口史の研究』高橋梵仙著『日本社会史・日本人口史』本庄栄治郎著

註47　『昭和定本日蓮聖人遺文』第二巻　昭和六三年　一六二五頁

註48　『前掲書』一六四一頁

註49　〃　一六六三頁

註50　〃　一七三一頁

註51　〃　一八一二頁
註52　〃　一八二六頁
註53　〃　一八四七～一八四八頁
註54　『日蓮聖人真蹟集成』第九巻　法蔵館　昭和五一年　一二三頁
註55　『昭和定本』一八六八頁
註56　『前掲書』一八七二～一八七三頁
註57　〃　一八七八頁
註58　『増訂古辞書の研究』川瀬一馬著　昭和六一年　八九一頁
註59　『日本書紀成立の研究』友田吉之助著　昭和四四年
註60　『古事記と日本書紀』坂本太郎著　吉川弘文館　平成元年
註61　『前掲書』一九二頁
註62　『新訂増補國史大系8』吉川弘文館　昭和四〇年　所載
註63　『日本略記』續々群書類従　第八地理部　一一頁
註64　『本朝書籍目録考証』和田英松　三八一頁、『倭王篇研究並びに索引』解説部